

体験版

エンジニアありさ、

淫らな三百六十五日

シリーズ2

開発されたカラダ、墮ちていくワタシ

朝倉 楓

*Kaede Asakura*

# 体験版

エンジニアありや、淫らな二日六十五日

シリーズ2

～開発されたカラダ、堕ちていくワタシ～

第三卷（全三卷）

©2025 朝倉 楓 All rights reserved

無断転載・二次利用を禁じます。

## この物語のあらすじ

バンコクで始まったのは、不倫相手の佐藤との濃密な生活。

夜ごと抱き寄せられる度に、ありさは身体の奥でなにかが書き換わっていくのを感じてしまう。

蒸し暑い夜気、絡む息、ちょっとした仕草だけで全身が反応するほど——もう佐藤以外が考えられない。

そしてサムイ島へ。

海風と秘密の空間に包まれ、ありさは自分でも驚くほど素直に、敏感に、佐藤の求めに応えてしまう。

恋でも、ただの快樂でもない。

もつと深い、戻れないつながりまで到達する第三巻。

本作はフィクションです。登場する企業・団体・人物はすべて架空であり、実在のもとは一切関係ありません。



## 目次

Day 14	アナルなめ	4
Day 15	サムイ島	16
Day 16	最後の朝	34

## Day14 アナルなめ

今週は本当に、本当に最高の一週間だつた。

心も体も、こんなに満たされた日々なんて、他にないつて思えるくらい…。

火曜日からずっと、ユウトさんと一緒に朝を迎える続いている。

ベッドのシーツに絡まる体温、優しい朝陽が部屋に差し込む瞬間……もう「妻」だよね？

そんな甘い妄想が、胸をくすぐる。

木曜日の夜も、たっぷり抱いてもらつた。

激しい余韻に浸りながら、ユウトさんの胸をチロチロと舌でなぞつていると、彼の声が低く響いた。

「ありさ。週末は短いけど、バカンスに行こう。もうチケットもホテルも予約した。明日の夜の便だよ。足りないものは、買いに行こう。午後は早退していく、山本には話してある。」

えつ、バカنس？まるでハネムーンみたい！

心臓がドキドキ高鳴つて、思わずニヤニヤが止まらなくなつた。

「嬉しい！どこに行くの？」

つて、興奮を抑えきれずに聞いた。

「サムイ島だ。ビーチが綺麗だよ。僕もワクワクが止まらないよ」  
つて、彼の笑顔に、胸が熱くなつた。

嬉しさが爆発して、ユウトさんをベッドに押し倒し、四つん這いにさせる。

私の手が彼の腰を優しく撫で、尻肉を広げて露わになつた秘部に顔を近づける。

「ユウトさん……ふふ、私の舌で、トロトロに溶かしてあげる」  
つて、息を吹きかけながら囁くと、彼の体がビクッと震えた。

舌先を優しくアナルに這わせ、最初は軽く触れるだけ。

湿った感触が舌先に広がり、温かく柔らかな皺が微かに収縮するのを感じる。

ユウトさんの体がビクッと反応し、甘いムスクのような匂いが鼻腔をくすぐつて、体中を熱い興奮が駆け巡る。

ゆっくりと舌を動かし、皺の一つ一つを丁寧に舐め上げ、円を描くように回す。

時折、舌を尖らせて軽く押し込み、内部の柔らかさを探り、湿り気を増す感触に自分の息が荒くなる。

チュパツ、チュルツという卑猥な音が響き、ユウトさんの腰が無意識に揺れ、もつと求めているのが伝わってくる。

「ふふ、ユウトさん、こんなに感じてるの？ 私の舌が、あなたのここを溶かしていくよ」

心の中で囁きながら、舌の動きを速め、吸い付くように愛撫を続ける。

皺の溝をなぞり、中心を優しく突くたび、熱い汁が滲み出て、味が混じり合い、頭がクラクラするほどのエロい感覚に包まれる。

「あつ……ありさ、そんな……気持ちいい……」

ユウトさんの声が震えて、私の芯を熱くする。

そのまま下に潜り込み、熱く脈打つものを口いっぱいに含む。

硬く張りつめた肉棒が喉奥まで滑り込み、唾液が滴る感触に、頭がクラクラす

る。

「んっ……ユウトさんのここ、全部私のもの♡ イカせてあげる、もつと深く……」

四つん這いにさせたまま、彼の腰を掴んでリズムを刻み、舌と唇で激しく愛撫する。

ジユポツ、ジユルルツ、グチュグチュと淫らな音が部屋中に響き渡り、喉の奥で熱く震える肉棒の感触が私を狂わせる。

唾液が溢れ、糸を引きながら滴り落ち、ユウトさんの太ももを濡らす。

私の舌が根元まで這い回り、激しく吸い上げるたび、ビクビクと脈打つ硬さが喉壁を押し広げ、息もつかせぬ快楽の渦に飲み込まれる。

「もつと……もつと激しく、ユウトさんを壊すくらいに」

心の中で叫びながら、頭を前後に振り、喉奥まで深く咥え込んでピストンする。ジユボツ、ズチュツという粘つく音が加速し、部屋の空気を震わせ、私の下半身も熱く濡れそぼる。

体が震えるほど快感が頂点に達し、ユウトさんの腰が砕け散るようにガクガクと崩れ落ち、彼をイカせてしまった

「ありさ、すごいよ。こんなのは初めてだ。たまらない……」

熱い白濁が口内に溢れ、飲み込む瞬間の甘い余韻が、二人をさらに深く結びつける。

私のエロの性能は、開発者の意図を超えて、進化していく……さらにハイスペックなエロマシーンへ……もう止まらない。

金曜日の朝、ホテルを出る時にユウトさんが耳元で囁いた。

「僕があげたおもちゃを全部持ってきてね。」

その言葉に、秘められた期待が体を疼かせる。

仕事中もニコニコが止まらなくて、現地のメンバーに  
「何がそんなに楽しいの？」  
つて突っ込まれちゃった。

あつという間に午前中が終わり、山本さんが優しく言つてくれた。

「ご両親がサムイ島に旅行にいらつしやつているんだつてね。親孝行してくるといいよ。」

サムイ島に一緒に行く人は違うけど、行くところは一緒だし、内心でニヤリ。

「はい！ ありがとうございます♪」

つて、全力でお礼を返した。

午後は、ホテルのある駅の一つ隣の駅にある大きな高級テバートに、二人で買い物へ。

賑やかな店内、トロピカルなBGMが流れる中、小型のスーツケースをお揃いで選ぶ。

お揃いのビーチウェアも、タイっぽいデザイン、軽やかな生地が肌に心地いい。そして水着。

「水着は二着買おう。一着はありさが、もう一着は僕が選ぶね」つて、ユウトさんの目が輝く。

私は大好きなブルーのビキニを選んだ。

ハイレグだけど、ちゃんと面積のあるデザインで、鏡に映る自分の曲線が自信をくれる。

ユウトさんは、かなり迷つてた。

黒のセクシーワンピース、情熱的な赤のビキニ…どちらも恥ずかしいほど露出度が高くて、試着室で頬が熱くなる。

最後に選んだのが、オレンジのネオンカラーのビキニ。

Tバックがセクシーすぎて、想像するだけで下腹部が疼く。

「青の水着も可愛いよ。それとこのセクシーなものもありさに似合うし、サムイ島のビーチに合ってる。」

準備は整つた。

私たちはバンコクから約一時間のフライトを終え、サムイ空港に到着した。

（続きは本編で・・・）